

ばく りゅう
麥粒

2015. Winter

麦粒 / NO. 124

発行・キリスト教センター

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？
—こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別—
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ —間 (はざま) から読む聖書—
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィッシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)

目 次

- 自分の家に帰りなさい 馬場 詩織 (2)
- 感謝について P.R. モロウ (7)
- 「みんなで生きる」 大江 浩 (9)
～人々のいのちと向き合って
- 内なる時計の刻み 大石 邦弘 (13)



自分の家に帰りなさい

馬場詩織

一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。これまでも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は碎いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。そこで、イエスが、「名は何とのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。

ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語った。そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いだした。イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。

(新約聖書 マルコによる福音書5章1～20節)

テレビ電話の仕事

私は名東区にある名古屋東教会で牧師をしています。毎週木曜日だけは名古屋YWCAでテレビ電話を使った仕事をしています。その仕事は名古屋YWCAの震災支援事業の一つです。どういうものかということ、福島県にある小さな漁村の三つの小学校の児童たちとテレビ電話を使って色々な話をするというものです。この活動は震災直後から始まって丸三年続いています。ほんのお手伝いのつもりで始めたことですが、今や私にとって牧師としての大事な仕事に変わりました。こどもたちと話す内容は様々です。最初は震災や津波に関する話が話題に上りましたが、最近ではそれ以外の話もするようになりました。学校の友達との人間関係の悩み、あるいはもっと明るいこと、サッカーやバレーボールなどスポーツが盛んな地域なので試合をしてどんな結果だったとか、あるいは他に自分がどんなことが好きだとか、家族とはどんな関係なのかとか、たぶん学校の先生が聞いたからこんな話までしているのかということまで話をしてくれます。

この活動を通してわかってきたことは、こども本人が普段注意を向けることのない、あるいは注意を向けられない意識の下にある事柄を話すことが、実は大切なのではないかということです。例えば津波といったような震災の問題を忘れかけているのに、わざわざ寝た子を起こすようなことをなんでするのかという議論になりそうですが、そういうことではありません。意識することで抱えていた問題に気づくこと、それに向き合うことで、それが解決できる問題だということを本人に気づいてもらいたいと

いうことなのです。しかしながら震災から三年も経つと色々な団体が支援の手を引いていっているという現実もあります。その理由は被災地が日常を取り戻し、復興が行われた、問題はもう解決されたというふうに判断されたからですが、むしろ問題は今後ではないのかと私は思っています。

今後の問題

原発事故を含んだ震災や津波による心的外傷、これをトラウマといいますけれども、トラウマがどんな影響を今後こどもたちに与えるかという可能性はまだ誰にもわかっていません。トラウマは脳の中のどこかに隠れた記憶へと変わって、普段は隠れているけれども、自分の意識とは関係なく様々な形で勝手に浮き上がってきてしまい、その人を苦しめる、そういう現象を起こすものです。幼いこどもは成人よりもトラウマを受けやすいといわれています。さらに成長過程の先々でトラウマが原因で問題が起きていく可能性が高い傾向にあります。同時に年齢を重ねるごとに問題が減っていくのではなく蓄積されていく可能性がある指摘されています。つまり今とか数年先だけの問題ではなく、こどもたちが成長して大人になる中で、トラウマが原因で様々なストレス障害を引き起こす可能性が大きいということです。夜眠れない、うつ病を発症する、引きこもり、DV、アルコール依存、人と関係性を持ちにくい、幼児に対する虐待など様々な症状が考えられます。これをPTSD、心的外傷後ストレス障害と呼びます。蟻塚亮二先生という現在福島のクリニックで診療されておられる精神科のドクターがいます。以前蟻塚先生は勤務しておられた沖縄の診療所で、

沖縄戦を体験した高齢者のPTSD反応についてのレポートをされました。そのレポートが海外でも非常に評判になっています。沖縄戦はすでに70年前の出来事ですが、今になって奇妙な不眠を訴えられた高齢者を診察しておられた先生は、その不眠の傾向にうつ病ではないサインを感じたというふうにおっしゃっています。その奇妙な不眠はその方が幼い頃に体験した戦時中の記憶によるものだったということが段々にわかったといいます。こんな話もあります。ある高齢者が足に何の損傷もないに関わらず痛みに耐えかねて様々な病院をまわった末に蟻塚先生の診療所に行き着き、そこで話をしてわかったのは、幼い頃に体験した沖縄戦で遺体を踏んで逃げ回った記憶が引き起こしたPTSD反応だったということでした。戦争を生き残り、戦後の混乱や今も続く沖縄の基地問題の中を一所懸命に生きて、ある人は結婚して家庭を築き、子どもを育て、働き、高齢となって人生の終わりを意識し始め、やっと安心して生活できるようになった、そういう時になってPTSDを発症したということです。

PTSDは通常出来事の最中やその直後にはあまり出現しないと言います。それは状況を生きるのに必死になるからです。しかし安心できるようになった状況下で何かがきっかけとなってその記憶が浮き上がってくる、しかもとんでもない後になってから記憶が蘇ることもあるということが蟻塚先生のレポートによって証明されました。このことを晩発性のPTSDと呼ぶのだそうです。他にも命日や記念日になるとうつ症状になったり、においの記憶、例えば死体が焼けるにおいを体験してそれが後々まで尾を引くフラッシュバック症状が出たりパニック

発作となる場合もあります。沖縄では集団自決が起こるなど、多くの民間人が犠牲になりました。戦争はこんなに複雑で、こんなに年を経ても苦しみを味あわなければならない人たちをつくり出すんだということを改めて思い知らされます。こういった症状は、どれもこれまでトラウマと結びつけられてはきませんでした。同じことが福島のごどもたちに今後起こる可能性があるというふうに蟻塚先生は指摘されています。私が問題は今後だと主張するのも正にこの点です。もちろんテレビ電話で20分程度の時間に話をすることでトラウマから回復するなどとは私も思っていないです。でも自分の気持ちを言葉にするという訓練には確実になると思います。普段私たちはたとえ大人になっても自分の気持ちを言葉にしているのでしょうか。私は大半の人がしていないと思っています。

SOSを寄せられるかどうか

私が相手をしている小学生たちが大人になって、もしそのうち何人かがPTSDを発症して苦しむようなことがあって、周囲に助けてとか自分の話を聞いて欲しいとか、自分の気持ちを言葉に出来たとすれば、少しは名古屋のテレビ電話のおばちゃんも役に立つようなことになるんじゃないかと、私はそう思っています。苦しんでいても助けてと言えない人はとても多いです。そのため独りで苦しみ続け、最悪の場合自ら死に至るといった人もいます。実に3万人の人がそうして自ら命を絶っているという病的な状態が10年間も私たちの社会で続いています。

先ほどご紹介した蟻塚先生はトラウマを乗り越えるために必要なことの第一

にSOSを寄せられるかどうか、ということを手挙げておられます。その他に語れる相手の存在があるかどうかも大切な要素だとおっしゃっています。つまり最も大事なものは外に発信していくということです。どんなに恰好悪くてもいいから、外に自分の気持ちを発していくことで自分の内にある力が呼び覚まされていくのです。皆さんは困ったことが起きた時、ピンチに陥った時に助けてと周りの人に言うことができるでしょうか。あるいはそう言えるお友達を持っていらっしゃるでしょうか。

苦しみに関わったイエス

今回の聖書は、悪魔が乗り移った人とイエスとの出会いの物語です。石で自分を傷つけ、鎖や足枷で拘束しようとしてもそれを引き千切ってしまう、昼も夜も叫び続けた、ということはこの人が眠るという肉体にとって重要な休息が出来なかったことを示しているように思えます。今だったらこういう状態の人は何らかの精神疾患と診断されると思いますが、聖書では多くの悪魔がこの人に乗り移って苦しめているからだとして説明しています。この男性はイエスを見るなり走り寄って来て、こう言います。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」他の聖書の訳をご紹介しますこんな言葉になります。「あんたは関係ないだろう。いと高き神の子イエス。私を苦しめるようなことをしないと神に誓ってくれ」放っておいてくれと言いながらもイエスのことを神の子と認めている、なんとなく矛盾した言い分に助けてというメッセージをイエスはくみ取ったのでしょうか。イエスは男性に憑りついていた悪霊を追い出し

す。悪霊たちは近くに居た豚の群れに乗り移り、2000匹もの豚が群れをなして崖から湖になだれ込んで溺れ死んだと書かれています。収入のために飼っていた豚が大量に溺れ死んだという損失と同時に、これまで狂気に苦しんでいた男性が服を着て正気になって座っているのを見て町の人たちは怖くなってイエスを追い出しにかかりました。そのため船に乗ってその場を離れて行こうとしたイエスに、癒された男性が一緒に行きたいと申し出ますが、イエスはそれに対して自分の家に帰りなさいと言います。自分の家というのは、これまでその人が生きてきた背景である文化、習慣、生活など色々なその人たらしめているもののことを言っているんだと思います。イエスは宣教目的で船に乗って違う価値観、文化、習慣の世界に生きる人の住むこのゲラサ人の地にやって来ましたが、イエスがやろうとしたことは自分の考えの押しつけではありませんでした。そうではなく助けてと言ったことができないほど苦しんでいる人の、その苦しみに関わることでした。イエスは時には教義議論することはありますが、苦しんでいる人に自らコミットしていく姿も聖書のいたるところで語られています。そうすることで神様は人が苦しんでいることを望んでいないんだよということを伝えようとしたのではないかと思います。宣教というのは何も教会に来て洗礼を受けさせてたくさんの人をクリスチャンにするということだけではなく、結果的にそうなることはあります。しかしそれだけが宣教ではなく、時には人と出会うこと、あるいは関わるということもまた宣教と言えるものではなく、自分の家に帰りなさいというふ

うにも言うんです。助けてと言えないほど苦しんでいる人はきっと世の中にいっぱい居ると思います。だから私は電話の相手の小学生にも言っています。助けてと人に言えるようになってね、というように。

おわりに

皆さんにもお願いします。もし自分ではどうにもならないことが起こって困ったり、危機的な状態になったら、どうか周囲の誰でもいいから勇気を出して助けて

とメッセージを出してください。そしてもし誰かに同じように言われたら、何にも出来なくても話だけ聞いてあげてください。そうすることで一緒に考えてくれているんだということだけは絶対に伝わります。そして極端な思いからその人を救ってあげることが出来るかもしれません。たとえその一日だけでも、次の日にはやっぱりつらい思いが続いたとしても、今日その人を自分の家に帰してあげられます。どうかそのことを覚えていただければ幸いです。

(ばば しおり 日本基督教団名古屋東教会牧師 2014.11.11 チャペルアワー奨励)



感謝について

P. R. モロウ

今日は11月6日です。11月は私が1年で一番好きな月です、というのも日本では季節の変わり目で紅葉が美しい時だからです。私はアメリカ人です。アメリカ人にとって11月は特別な月です。アメリカでは11月に感謝祭があります。感謝祭は国民の祝日で、300年前に始まったお祭りです。ヨーロッパからアメリカに渡った最初の人たちが始めました。感謝祭は収穫のお祭りで、収穫したものを料理します。ジャガイモ、トウモロコシ、人参などです。そういう収穫物を料理する時でもあり、幸せを感じる時です。どうしてかという収穫があったからです。たくさん収穫があるということは、その冬に食べ物がたくさんあることだからです。アメリカが独立した頃は生きるために十分な収穫を確保することで精一杯でしたから、感謝祭はとても大切にされています。農家の人たちは天気や神様、冬に生き残るために助けてくれる全ての人に感謝をささげました。さて、今日私が話したかったのは、収穫感謝祭についてではなく感謝(Gratitude)についてです。感謝を知ることはきっと皆さんを幸せにします。"Gratitude"とは感謝する、ありがたく思うということです。日本語で一番似ている表現だと「いただきます」です。「いただきます」を言うことで私たちは感謝しています。誰かに何かしてもらった時、誰かに何かをもらった時にも感謝します。

周囲の助け

ところで先ほど言ったようにアメリカ

が独立した頃の生活はとても苦しいものでした。人々は生きるために十分な食事を確保できませんでした。でも今は違います。食事が確保できない恐怖にとらわれることなく過ごしています。それは日本も同じです。でもその頃と同じように今でも食べ物や水がなければ生きていけないことには変わりありません。アメリカ先住民の伝承では収穫を母と呼んでいます。母がいなければ生まれることもできないからです。でも人間は食べ物と水だけで満足できません。他にも必要なものがあります。それは人との繋がり、家族関係や友人関係などです。私たちには助けや支え、愛が必要です。そういう人との繋がりがなければ私たちは幸せになれません。私たちはそれぞれ独立した人間としてこの世にいますが、周囲にたくさんの方がいます。ここに重要な意味があると思います。私たちはどれだけ他の人を支えているのかしっかり覚えておくべきです。いつも学校では先生が学生に研究するように教えています。成功するためには研究が必要です。これは本当です。成功の秘訣は研究にあります。でも成功するためには研究だけではなく、周囲のサポートが必要です。例えば今皆さんは名古屋学院大学の学生として一生懸命に学んでいます。でも皆さんが学ぶ機会が与えられているのは、他の人の支えがあるからです。具体的には両親の支え、家族の支え、教師の指導があるからです。皆さんが成功するようにとその人たちが支えてくれています。それはどんなことにも

言えます。成功の陰には誰かの支えがあります。ある部分では自分の努力によって、そして別の部分は周囲の支えによって成功しているのです。成功は周囲の助けによってなるものです。そのことを決して忘れてはいけなく、誰かを助けることも忘れてはいけません。だから支えてくれている人にありがとうと伝えること、感謝することが大事です。

ありがとうのいいこと

ありがとうと感謝すると、2つのいいことがあります。1つは誰かにありがとうという、いい気持ちになります。例えば皆さんが私に何かしてくれたことで、私が「ありがとう」と感謝すると、皆さんは幸せな気持ちになりますよね。そういうやりとりの中で私と皆さんの間に繋がりができます。これが1つめのいいことです。実は私が皆さんに「ありがとう」と感謝することで、私にもいいことがあります。感謝することで、私は私のために誰かが何かしてくれたことを忘れません。これが私の心、人生にとって大事なことです。これがいいことの2つめです。感謝することでポジティブな気持ちでいられます。ポジティブな気持ちでいることは、何か問題に直面した時に重要なことです。人生の中で大きな問題に直面することは避けられません。時間や気力をその問題にかたむけなければならぬ時があります。それはそれで必要な経験です。しかし一方で問題と向き合うことはネガティブな気持ちになることがあります。誰しもそういう痛みを抱えることがあります。問題を抱え、幸福を感じていないという

(P. R. モロウ 外国語学部教授 2014.11.6. カレッジアワー奨励)

ことを知っている相手と関わると、自分も同じような不幸な気持ちになります。だから相手との距離をとりたくなくなります。でもポジティブな気持ちを持っていると、ネガティブな考えばかりにならないように守ってくれます。冷静に前向きな考え方をすることができるように助けてくれます。前向きな気持ちが幸せへ導いてくれます。

毎日2分感謝

私が感謝することについて考え出したのは最近読んだ小さな記事がきっかけです。筆者は感謝について1つの考えを提案していました。提案は、できれば毎日2分間、全てのことに感謝する時間を持ちましょうというものです。2分間というのは長い時間ではありません。忙しい毎日を送っていると言っても、2分間ならどうにかなるはずで。私はこれを毎晩実行しています。特に眠れない日、問題を抱えて明日どうすればいいのかと悩む夜に、何でもいから感謝できること、自分の人生の中でいいことは何かあったらどうかと考えます。そうして何か良かったこと感謝できることをみつけると、心の中が平和な気持ちになります。だから皆さんにもおすすめします。毎日少しの時間でいいから目を閉じてください。そして人生の中で何か感謝できることを探してください。そうすることできっと皆さんは少し変わることができます。少しずつポジティブになり、幸せな気持ちが増えて、周りの人を幸せにすることができるようになっていきます。

「みんなで生きる」～人々のいのちと向き合って

大江 浩

私は、日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)の大江と申します。日本キリスト教海外医療協力会は、団体名の通りキリスト教に基づく海外医療協力をミッションとする団体です。本日は、途上国での医療協力の現場から「みんなで生きる」と題してお話をさせていただきます。私たちの団体は1960年に設立され、半世紀以上、アジア・アフリカなどの医療過疎地へクリスチャン医師や看護師などの保健医療従事者(ワーカー)の派遣などを行ってきました。

JOCSの2人目のワーカー・岩村昇医師は1962年、今から52年前にネパールの山岳地域の病院を拠点に18年間医療活動に尽くし、「ネパールの赤ひげドクター」と呼ばれた方です。ネパールはヒマラヤの国、8000m級の山々に囲まれた非常に貧しい国です。ドクター岩村が赴任した時、ネパールは人口約10万人に対して医師1人の状態で、首都カトマンズなどを除き国全体が「無医地区」のような状況でした。今も医療過疎地が多い状態はあまり変わりません。

ドクター岩村の任地は、山の上にあるタンセン病院でした。通常、病院に行くにも患者さんは徒歩で平均6時間、遠ければ3日から1週間もかかります。道のりは険しく、山を越え谷を越え川を越えといった具合で大変です。「交通手段がない。費用がない」、「診察代が払えない。入院費用が払えない」などの理由で、貧しい人たちが病院へ行くことは困難です。貧しく重

症の患者さんほど、病院に来ることが出来ません。ドクター岩村は、「病院の診察室で待っていても、来れない患者さんが多くいる。本当に自分を必要としている患者さんが重症化したり、亡くなったりする」という現実と直面しました。であれば「病院を離れて、自ら患者さんのもとへ赴いていくしかない」と決意し、各地の村に赴く「医療キャラバン隊」(いわゆる巡回診療活動)を始めました。

医療キャラバン隊は、道案内+荷役のシェルパさんや看護師などによるチームで、結核などを発見する簡易版レントゲン撮影機や薬と食料など持ってあちこちの村に行くようになりました。ドクター岩村は、村での巡回診療活動が一区切りつくと、薬品や食料を補給するために拠点病院であるタンセン病院へ戻り、また他の村に行くという活動を続けました。

ある時、村での医療活動を終えてタンセン病院へ帰る道すがら、その村で重い病気のおばあさんに遭遇しました。その村からタンセン病院へは3日間かかるところでした。すると、通りすぎりにネパールの若者がやってきて、そのおばあさんを背負って一緒に3日3晩タンセン病院まで歩いてくれました。ドクター岩村が、その若者にわずかだけれどお礼にお金を渡そうとしたら、彼は「サンガイ・ジウナコ・ラギ」という言葉を残して、お金を受け取らずに去って行ったそうです。「サンガイ・ジウナコ・ラギ」というのは、ネパールの言葉で「みんなで生きるために」とい

う言葉です。その若者はとても貧しい身なりで、しかも裸足で靴も履いていませんでした。彼は、「自分は貧しいけれども、自分はおばあさんを背負う元気と力がある。だから3日間おばあさんに自分の元気をお裾分けしただけだ。お礼を受け取るわけにはいかない。」と言って去っていったそうです。

スライド写真にあるように、彼はずっとおんぶしたのではなく、背負子でおばあさんを背負って歩きました。決して平坦な道ではありませんでした。さて、では彼の職業は何だったのでしょうか？実は、彼はポーター（荷役）で、物を運ぶのが仕事でした。だとすると、普通に考えればおばあさんを背負って運んだことは、彼はその報酬としてお礼を受け取ってはいはずでした。けれど彼は受け取りませんでした。貧しくとも、人と人とが困った時に支え合い、助け合う繋がりがあることを示す物語です。そこから考えさせられるのは、ネパールには「経済的」あるいは「絶対的な貧困」があるかもしれないけれど、支え合う豊かさがあります。一方、物質的に豊かな日本では年間約3万人の人が自死するという、人と人との繋がりを失った「関係性の貧困」があるのではないか、ということです。本当の豊かさとは、一体何なのでしょう？

ドクター岩村は、偉い学者さんから「共に生きるとは？」と説教をされたのではなく、名もない1人のネパールの若者の生きざまから「みんなで生きることを教えられ、感激しました。「あの若者は、もしかするとイエス様だったのかもしれない」と語る人がいます。先ほど言いましたが、その若者は裸足でした。足の裏は血だらけだったそうです。私たちは、この語り継がれた物語から、貧しさの中の豊か

さや隣人と支え合い、「みんなで生きる」人々に感銘を受けました。この物語に出会う前、JOCSの会報の名前は「医療と光」でした。しかしその後、それは「みんなで生きる」に変わりました。

タンザニア

－あるワーカー（助産師）の働き

JOCSの活動はアジアを中心とした活動からアフリカへ、そして保健医療活動から福祉的な分野にも広がっています。JOCSは、2007年に東アフリカのタンザニアに助産師の清水範子ワーカーを派遣しました。彼女は、タンザニア・タボラ州のイブリ保健センターで助産師として働きました。タンザニアには26州ありますが、タボラ州の医療環境は下から2番目です。JOCSは清水さんの後に倉辻忠俊さんという小児科医を派遣しましたが、その倉辻さんはタボラ州でたった1人の小児科医でした。

ワーカーの派遣任期は、1期3年間で、清水さんは任期の前半の1年間で700人の赤ちゃんの助産に立ち会いました。低栄養・低体重で生まれてくる赤ちゃん、母子感染でHIV感染している赤ちゃんなど様々でした。お母さんが出産時に死んでしまう、赤ちゃんの命が亡くなってしまう、あるいは重い病気や障がいをもって生まれてくるというケースも少なからずありました。清水さんは、赤ちゃんをとりあげることが自分のミッションなのに、産まれたと同時にお母さんや赤ちゃんの死を看取るという現実と直面しました。「守れるはずの命が守れない」という苦しみや挫折、無力感に彼女は悩みました。タンザニアだけでなく、途上国では自宅出産が一般的です。およそ10人中7～9人は自宅出産という状況です。自宅で専門家の介助なし

に産む、あるいは伝統的助産婦いわゆる「村の産婆さん」の助けを借りて赤ちゃんが生まれてきます。産婆さんの中には資格を持たず、基本的な衛生知識がない人も多く、そのために危険な出産で母子ともに命が失われることもあります。

清水さんが勤めていた保健センターには、出産のため自力で歩いてくるお母さん、自力歩行が無理という場合は牛の背に乗せられて妊婦が運ばれてくることもあります。難産のケースや手遅れのケースも少なくありませんでした。HIVの母子感染のリスクを考えると、彼女は生まれてくる赤ちゃんのみならず、生れる前の赤ちゃんの命やお母さんの栄養のことなど様々な問題にも取り組まねばなりませんでした。

バングラデシュ

－彼らの中に、「イエス様がいる」

私たちの活動が医療から福祉の分野に広がっている事例を一つご紹介します。

JOCSは、バングラデシュに岩本直美ワーカー（看護師）を派遣しています。岩本さんは、長くバングラデシュの病院などで障がい者支援の活動をしてきましたが、今は知的な障がいのある人たちが共同生活をする家「ラルシュ（フランス語で「箱舟」の意味）コミュニティ」で、子どもたち・男性たち・女性たちなど4つの家／コミュニティ（一つの家の単位は10数人）のまとめ役として活動しています。

ラルシュ・コミュニティには、知的ハンディのみならず身体的なハンディ、重い精神疾患を持つ人もいます。彼らの生活を、スタッフやボランティアの人々が支えています。写真にあるメンバーの中には、バングラデシュの首都ダッカで、文字通り丸裸でごみ箱に捨てられていた

女性、残飯を野良犬と争うように食べていた女性などもあります。彼らは障がいを持っているせいで親から捨てられ、路上生活をしていたところ、バングラデシュのテゼのブラザーたち（フランスに本部のある超教派の男子修道会の修士）に保護されて、このラルシュで生き直しを始めました。

ラルシュ・コミュニティでは、暮らし始める時に2つの約束事があります。

1つ目は、「誕生日を決める」です。彼女たちは自分の年齢を知りませんし、誕生日を知らないため、誕生日を決めます。誕生日を決めるのには大切な意味があります。メンバーたちはそれぞれが非常に過酷な人生を歩んできました。保護されなければ、生きていなかった女性たちです。ささやかながら誕生日をお祝いする時に、メンバーたちは自分が祝われる存在になると同時に、他者を祝う存在になります。

2つ目は、「名前を決める」です。彼女たちは、自分が誰か知りません。名前も授かる前に捨てられてしまったか、名前のない状況で生きてきました。だから名前が与えられることで、再び命が与えられるのです。私たちにとっては「誕生日がある、自分の名前がある」ということは当たり前のことですが、それとは正反対の世界で生きている人たちがいます。

私は6年前、彼らと出会った時に教えられたことがあります。障がいの故に辛い苦しい人生を歩んできた彼らではあるけれど、「彼らの中に、イエス様がいらっしゃる」ということです。闇のような人生を生きてきた彼らの中に光がある。そして「あなた（私）は誰ですか？誰のために生きていますか？あなた（私）は何のために生きていますか？」ということを経験されているような、非常に衝撃を覚え

ました。私はその時、50年以上にわたりJOCSが海外医療協力を貧しい人たちへの施しのように活動してきたのではなく、彼らの豊かさや恵みによって活動を続けてこられたのだ、そのことが大きな励みだということをお教えされました。聖書に「隣人(となりびと)」という言葉がありますが、隣とは、物理的な距離ではありません。心理的な距離です。一つ一つの隣人との出会いの中で、その痛みを分かち合い、イエス・キリストの教えに従い、活動を行うことが証しなのだということを私たちは学んでいます。

東日本大震災の避難所

「分かち合う」ということ

JOCSは、海外だけではなく東日本大震災の被災地でも支援活動を続けています。私たちは、バングラデシュでもネパールでもタンザニアでも「よそ者」です。そして東北の被災地でもやはり「よそ者」です。よそ者としての限界はあります。しかし、よそ者だからこそできることもあります。途上国の医療過疎地での活動経験が、被災地で生かされています。最も私たちが必要としている人々の元へ赴き、そこに留まるという経験です。

岩手県釜石の避難所で出会ったエピソードを1つご紹介したいと思います。その避難所でパン2枚が配給されていた時のことです。あるおばあさんが自分に配られたパン2枚を受け取った時、「私はパン1枚でいいから」と言って、もう1枚を隣にいた小学校5年生ぐらゐの女の子に渡しました。女の子には幼い弟が2人いました。女の子はおばあさんからいただいた

パン1枚を弟たちと分かち合いました。その場面を見て、私は思わず涙しました。そしてその時、「分かち合うところから、平和が生まれるのだ」ということを彼女から教わりました。同時に、あのネパールの若者がおばあさんを3日間背負って歩いたことによって元気を分かち合ったことと、避難所でおばあさんからいただいたパン1枚を子どもたちが分かち合ったことが、私に中で繋がりました。私たちは、「ボランティアは、何か特別な思いや技能を持った人がやる」というイメージを持ち、ボランティアを「括弧付」で考えがちです。国際協力もまた同じに、やはり「括弧付」で特別視し、自分から遠いこととして捉えがちです。けれどもボランティアとは、ごく自然に自分に出来ることを身近なところから、ということと繋がっているように思えました。

分かち合いから、「平和」が生まれます。そして奪い合いから「戦争」が生まれます。満たされたところでは、「もっともっと」と求めます。でも私たちが活動を通して見てきたのは、「持たない人がより持たない人と分かち合う豊かさ」です。真の協力の在り様から気づかされるのは、豊かな人が貧しい人に対する施しのようなことではなく、持たざる人がより持たざる人と分かち合うという事実です。ここに、イエス・キリストの働きがあります。私たちは、「微力」ではあっても、決して「無力」ではありません。私たちは、平和を創り出す存在です。イエス・キリストの平和を。今日、このような機会をお与えくださり、深く感謝します。

(おおえ ひろし 日本キリスト教海外医療協会(JOCS)事務局長
2014.5.8 カレッジアワー奨励)

内なる時計の刻み

大石 邦 弘

今日は、まず私が在外研修中に経験したことをお話しし、次にその私なりの解釈をしたうえで、みなさんに2つの提案をしたいと思います。今日のお話しをきいて少しでも共感してくださるなら、その提案を実践していただけたらと思います。

<ウィーンでの経験>

大学の教員は在職中に1年間、長期研修に出かけることがあります。私は2006年の8月から海外研修をしました。行先はヨーロッパのオーストリアです。オーストリアの研究所に1年間客員研究員という資格で受け入れてもらい、家族と共に1年間ウィーンで住むことになりました。そのウィーンで暮らした中で感じたことを、まずお話ししたいと思います。

みなさんも留学や海外旅行の際に感じるがあると思いますし、すでに実際に経験したことがあるかもしれません。もしくはこれから海外に行った際に、新たに経験するかもしれません。私が経験したことはこういうことです。例えば列車のチケットを購入しようと駅の窓口に行くと、物凄い長蛇の列ができていくことがよくあります。先頭の人が窓口で駅員と延々と話しを続けるため、全然列が捌けないわけです。私は何度かそういう場に出くわしました。列の後ろの人のことなんか考えずに、先頭の人は一生懸命駅員と話し込みます。

また別の事例です。ウィーンは音楽の都です。私はクラシック音楽が大好き

ですから、住んでいた一年間たくさんの方のコンサートに行きました。ホールでは基本的に開演の5分前に予鈴のベルがなります。これは大体どこの国でもそのように行われるわけですが、「もうすぐ開演ですよ、だから座席に着いてください。」というその予告です。日本だとベルが鳴る前から多くの人たちが座席に座って開演を待つことが多いのですが、ここウィーン、いやヨーロッパ全体でも同じですが、観光客は事前に座っているのですが、地元の多くの人たちは友人や家族と談笑しながら軽食をとりワインを飲んで、いつまでたっても座ろうとしません。多くの方はベルの音に関係なくそういうことをしています。ですから5分前のベルは2回、3回と鳴ることになります。

今お話しした2つの事例と似たような光景は、いろいろなところで見るようになりました。駅の窓口で話し込んでいる人に対しては「後ろの人のことをもう少し気にしてくれよ。」と思いますし、コンサートホールで自分の席になかなか着かない人に対しては「早く座ってくれないかと開演しないじゃないか。」と思ったりします。そんな思いを持つなんて当たり前だと思いますが、でもそういう経験を何度もしているうちに、いや、もしかしたらこんな行動もありなんじゃないかなという風に思いました。

<私なりの解釈>

どうしてそういう行動がありなのだろう

うと思ったかという、私なりの直感に頼った解釈ですが、私たち個々人はそれぞれの中に、例えるなら、内なる時計というものを持っているのではないのでしょうか。そして、その内なる時計の刻みというものに従って行動したいという風に思っているのではないのでしょうか。チケットの窓口でいつまでも駅員としゃべっている人や、コンサート会場でなかなか座らなかった人たちというのは、内なる時計の刻みに合わせて行動しているにすぎないのではないかという風に思ったわけです。

そのように内なる時計の刻みに身を委ねて生きていける人たち、ウィーンの人たちに対して、私は少し羨ましく思いました。確かに全ての行動を自分の内なる時計の刻みに合わせて行動してしまえば、物凄く身勝手な世の中になるでしょう。その結果として、社会生活を営むことはできないと思います。だからこそ、私たちみんなは目に見える時計を持っているわけです。私も持っています。それを自覚して共通の時の流れの中で、社会全体が同じペースで流れるように折り合いをつけているのではないのでしょうか。言いました通り、今私は正確な時計を持っています。このお話は10分間ぐらいと承っていますから、私はこの時計に従って10分間しゃべれるように努力します。仮に私が内なる時計の刻みで進めば、もしかしたら3限目に入り込んでしまうかもしれません。内なる時計の刻みと時計が示す時の刻みでは、多くの人でたぶん違うのだと思います。そのため、時計の刻みに合わすことは多くの場合ストレスを伴うのだと思います。ストレスがかかるからといって内なる時計の刻みに合わせれば、社会生活が送れなくなってしまう。それを避けるために私たちは、なんとかしようとしているのだと思います。でも私た

ちは、どこかで自分の内なる時計の刻みというものに、従って生きたい、暮らしたいという衝動を持っているのだと思います。

<私からの提案>

ここからは私の提案です。この話に少なくとも共感を持ってくれている人がいるなら、どこかで皆さんも自分の内なる時計の刻みというものに耳を澄まして欲しいと思います。内なる時計の刻みに身を委ねて欲しいと思います。おそらく肩の力が抜けて、楽になれると思います。私が見たウィーンの人たちは内なる時計の刻みに耳を澄ませることが多くて、その内なる時計の刻みに合わせて生きることができている人なのだと思います。そういう意味で、ウィーンの人たちを私は非常に羨ましく思いました。

私の提案はもう一つあります。自分の時の刻みだけではなく、あなたにとって大事な人、家族、友人、恋人とかそういう人の内なる時計の刻みにも同じように耳を澄ませてあげて欲しいと思います。今までその人に対して、イライラすることがあったりしたかもしれません。でも、その人の内なる時計の刻みというものを聴きとれば、その人の新たな一面が、もしかしたら見てとれるのかもしれない。そしてどこかに、あなたの内なる時計の刻みと同じテンポを持った人がいるのではないのでしょうか。おそらくその人とは、まさに馬が合うという状況になるのだと思います。そんな隣人を見つけるだけではなくて、自分とテンポの異なる人がいるということ、それを理解すれば、皆さんの周りの人との付き合い方がもっと幅の広いものとなっていくと思います。これから夏休みに入って海外旅行や留学をする人がいるかと思っています。別の国に行か

なくても、国内でもいろいろな人たちと会う際に、その人たちの内なる時計の刻みに耳を澄まして聴いて欲しいと思います。そうすればその人の内なる時計の刻みが自分とどう違うのか、もしかしたら一緒かもしれない、それを知ることが一つの楽しみになると思います。

私は自分の内なる時計の刻みと合う人がいるのかと、たまに考えることがあります。学内や友人ではなかなか見つけられませんが、音楽に関してはみつめることができました。ウィーンで活躍するニコラウス・アーノンクールという指揮

者です。彼の指揮する音楽が非常に私の気持ちと合うのです。どうしてか、彼の音楽を奏でる呼吸が私の呼吸とものごく合っている、それに気が付きました。ウィーンで彼のコンサートを何度か聴いた際に、そのことを強く感じました。おそらく皆さんの中にも、実際の友人関係、恋人関係、家族関係の中で内なる時計の刻み、テンポが合う人を見つけることができるのではないかと思います。

この2つの提案をぜひ試してみてくださいと思います。そうすればあなたの生き方、人付き合いが変わると思います。

(おおいし くにひろ 経済学部長 2014.07.10 カレッジアワー奨励)

